



ふれあいひろば

〔患者とともにある全人的医療〕

新潟市民病院
広報委員会



呼吸器外科のご紹介

新潟市民病院長 大谷 哲也

令和7年4月1日より呼吸器外科専門医が新潟市民病院に常勤医師として赴任します。新潟県の呼吸器外科専門医数は17人と少なく、新潟市民病院で呼吸器疾患の専門的外科治療を開始できることを嬉しく思います。

扱う領域は肺、気管、気管支、縦隔、胸壁、横隔膜の疾病が対象となります。主な疾患は原発性肺癌、転移性肺腫瘍、縦隔腫瘍、気胸、胸腔内膿瘍、外傷などで、それら対象となる疾患の外科治療を行います。

最も多い疾患は原発性肺癌で、手術としては胸腔鏡下肺切除術を想定しています。原発性肺癌は外科治療のみならず抗がん剤による化学療法も有効で、呼吸器外科・内科は連携して治療を行います。

手術は低侵襲手術である胸腔鏡下手術が中心となると予想され、それ以外には開胸手術も実施することとなります。胸腔鏡下手術に向けて胸腔鏡手術システム導入などの準備を進めています。

新潟市の令和6年10月時点の人口は76万7千人で、65歳以上の老年人口は23万2千人で、高齢化率は31%です。今後高齢化率はさらに増加する見込みです。高齢者に優しい低侵襲手術である胸腔鏡下手術を推進してまいります。

新潟市民病院は「患者とともにある全人的医療」の理念のもと、高齢者にも適用できる高度専門医療の実施を目指すとともに、基本方針の一つである「患者さんに信頼されるぬくもりのある医療」を継続して提供いたします。

表1. 呼吸器外科 外来担当表（令和7年4月1日時点）

	月曜	火曜	水曜	木曜	金曜
午前	大学医師 (新患)			古泉 貴久 (新患・再来)	
午後					

副院長就任のご挨拶

副院長 廣瀬 保夫

この度、副院長を拝命しました廣瀬保夫（ひろせ やすお）と申します。

私は1989年に大学卒業後にただちに当院に研修医として入職、1993年に救急専従医として救命救急センターに採用していただきました。

以降は一貫して救命救急領域の診療に従事し、2009年よりは救命救急・循環器病・脳卒中センター長を拝命しておりました。

私は医師としてのほぼ全てを当院での経験からいただいた、まさに生え抜きと自覚しております。

当院の救急医療の特徴は、救急医だけでなく各専門科が結集し、それぞれの領域の最先端の知見を活かして、質の高い救急・集中治療を提供している点です。

この30年、当院の救急医療をとりまく環境は大きく変わりました。1990年代前半は当院に搬送される救急車は年間約2000台のペースでした。

その後、救急医療の需要は増え続け、2024年の救急搬送（ヘリコプター搬送含む）は約6800件に達しました。

数的な増加だけでなく、高齢化が進行し複雑で多数の問題を抱えた患者さんが増加し、当院スタッフの懸命な努力にも関わらず、時に新潟市の救急医療のキャパシティをオーバーフローしてしまう現状があります。

また、当院は災害医療にも積極的に取り組んできました。本県の大規模災害であった中越地震、中越沖地震だけでなく、阪神大震災、東日本大震災、能登半島地震など県外にもDMATや災害医療班を派遣し大きな役割を果たしてまいりました。

そして、2020年に勃発した世界史に残る大災害といえる新型コロナウイルス感染症のパンデミックでも、当院は全職員が結束して多数の新型コロナの重症患者を救命しました。

当院の地域への貢献は客観的にみても極めて大であったと思います。

他の同規模都市と比較して、新潟圏域の急性期医療における当院の存在感は極めて大きく、正に最後の砦です。

最近の医療を取り巻く環境は極めて厳しく、当院も財政難に苦しんでいます。当院の診療が縮小したり制限されたりすると、新潟市民の皆様にも多大な不利益が生じるのは火を見るよりも明らかであり、そのような事態は何としてでも避けなければなりません。

私を育ててくれた市民病院、そして愛着のある新潟地域のために、今しばらく微力を尽くす所存ですので、何卒、よろしくお願いいたします。



救命救急・循環器病・脳卒中センター長 就任のご挨拶

救命センター長・救急科部長 熊谷 謙

4月より救命救急・循環器病・脳卒中センター（以下、救命センター）長、救急科部長を拝命しました熊谷 謙と申します。

新潟市出身で新潟大学を卒業後、県外で救急・集中治療を修行して平成15年にUターンで当院に入職し、22年より副センター長、26年より集中治療室長を務めてまいりました。

当院の救命センターは紫竹山の旧病院時代に廣瀬前センター長以下専従医わずか3名で発足後、順調に拡大発展を遂げ、現在は救急科として専従医15名で年間6000台以上の救急車ほとんどに対応しています。

消防局と連携したドクターカー事業でも地域の救急医療に貢献するとともに、集中治療分野においても他院の重症患者を積極的に受け入れて、厚労省の救命救急センター充実段階評価では毎年最高評価をいただいています。

そのような組織の運営を引き継ぐにあたり、重責に身の引き締まる思いでおります。

現在、多くの病院が経営危機に瀕し、新潟市の救急医療体制も再編を迫られるなど地域医療は厳しい局面にあり、その中で当院にも一層の努力が求められます。

救命センターは『重症・専門・救急を中心に、安全で良質な医療を提供します』という当院の基本方針いずれにも深く関わる重要な立ち位置にあります

が、我々救急科医だけで成り立つものではありません。他科の先生方や看護師はじめ多職種の皆さんの力を合わせたワンチームで、良質な救急医療を絶え間なく提供するという原点課題にこれまで以上に取り組み、新潟の救急医療延いては、病院経営にも貢献して行きたいと考えています。



少しだけ仕事を離れたときの姿を紹介しますと、

- ①**散歩好き**：メタボ解消のために
休日は1～2万歩ウォーキングします
- ②**クルマと旅行好き**：幼少期からカーマニア、かつ飛行機が恐いので何百キロ遠方でも平気で車で出かけます
- ③**お酒好き**：見かけによらず甘くフルーティーな日本酒が好きで『たかちよ』がお気に入り
- ④**イヌ好き**：3年前に最愛の息子（コーギー）を亡くし落ち込んでいましたが、最近やっとまた新たな仔を迎えたいと思えるようになりました。

こんなワタクシですが、救命センターのさらなる充実発展を目指して精一杯頑張りますので、どうぞ宜しくお願いします。

東曽野木小学校の皆さんから 素敵な贈り物をいただきました



今年も、東曽野木小学校の児童の皆さんから素敵な贈り物をいただきました。

いただいた贈り物は、院内のさまざまところに掲示させていただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

東曽野木小学校は、新潟市民病院のすぐ近くにあります。市民病院には、長期療養中のお子さんの学習のために「東曽野木小学校院内学級のぞみ学級」が設置されています。

児童の皆さんが、病気を治そうとがんばっている患者さんをはじめ、そのご家族や、病院のスタッフの皆さんを応援したいと考え、

院内掲示用の作品を2種類用意してくれました。

作品の一つは、「全校縦割り遠足（こなんこ遠足）」で歩いた鳥屋野潟公園で集めた色とりどりの葉っぱや、学校で育てた花を押し花にして飾った「メッセージカード」です。1年生から6年生までが仲良く活動する縦割り班（こなんこ班）ごとに集まり、協力して作りました。

もう一つの作品は、1年生が用意した「にこにこ笑顔のプレゼント」です。1年生のとびっきりの笑顔にさそわれ、皆さんも笑顔になってくれたら嬉しいです。

院内を移動する際、ぜひ作品をご覧になってください。

当院のホームページにも、
バックナンバーを掲載しています。

新潟市民病院 ふれあいひろば

検索

発行元：新潟市民病院 広報委員会

新潟市中央区鐘木463番地7 Tel 025-281-5151